

東アジア戦略概観

East Asian Strategic Review

2007

防衛省防衛研究所編

The National Institute for Defense Studies, Japan

はしがき

本書は、東アジアの平和と安定を確保するためには、この地域の安全保障環境について客観的な理解が必要であるという認識に基づき、防衛研究所の研究者が独自の視点から東アジアの安全保障環境を分析し、広く内外に提供するものである。記述の対象期間は、2006年1月から12月までの1年間が中心である。

本書は、2006年に生じた東アジアの安全保障上重要な事象について、国・地域別に章を立てて記述した。また、この地域の安全保障を考える上で重要と思われる中長期的な課題についても、2つの章を設けて分析している。今回は、第1章で、東アジア協力に対する中国の政策を分析した。第2章では、中央アジアと東南アジアにおける米国、中国、ロシアの関係を検討した。国・地域別の各章では、核開発に代表される北朝鮮の大量破壊兵器（WMD）問題、国際的な責任を求められる中国と日中関係、クーデターにより民主化の進展に疑問符が付いたタイの状況や統合に向けたASEANの動き、豊富なエネルギー資源を対外的な圧力として活用し始めたロシア外交、単独行動主義的な姿勢を見直し多国間協力を重視する第2期ブッシュ政権下の米国の安全保障政策、統合幕僚監部を創設して組織改革を行う自衛隊や日米同盟関係、日本の対北朝鮮政策などについても分析を行っている。本書が、読者にとって東アジアの安全保障環境を理解する一助となり、議論をさらに深める契機となることができれば望外の喜びである。

本書は防衛研究所の編集・執筆グループが研究者の立場から作成したものであり、政府あるいは防衛省の見解を示すものではない。各章の執筆担当者は、飯田将史（第1章）、恒川潤（第2章）、渡邊武（第3章）、増田雅之（第4章）、庄司智孝（第5章）、兵頭慎治・工藤仁子（第6章）、片原栄一（第7章）、高橋杉雄（第8章）である。また編集作業は、恒川潤（編集長）以下、飯田将史、伊豆山真理、大江健太郎、工藤仁子、助川康、塚本勝也、山下光、渡邊武が担当した。

平成19年（2007年）3月

防衛研究所 統括研究官
近藤 重克